

## 「総合的な学習の時間における主体的に活動する児童の育成」

日立市立田尻小学校

### 1 はじめに

新学習指導要領では、「主体的・対話的で深い学び」の実現に向けた授業改善を進めることが求められている。総合的な学習の時間では、指導の基本的な考えとして「児童の主体性の重視」「具体的で発展的な教材」「適切な指導のあり方」の三つから記述されている。これらの考えを基に本校の総合的な学習の時間の授業改善を図っていく。

### 2 研究のねらい

単元の流れや扱う学習教材をどのように工夫したり、指導したりすれば、児童の主体性が育むことができるのかを究明する。

### 3 研究の仮説

教科の学習やゲストティーチャーとの交流を通して、児童が発展性のある学習教材に出会い、明確なゴールイメージをもちながら探究的に学ぶことで主体性を育むことができると考えた。

### 4 研究の内容

#### (1) 魅力的で、発展性のある学習教材選び

総合的な学習の時間において最も重要なのは、魅力的で、発展性のある教材を選ぶことであると考えた。1年間を通して児童が興味、関心をもちながら繰り返し関わっていけるだけの魅力や価値が学習教材になればならない。そして、それと同時に学校や指導者が児童に身に付けさせたい知識や技能を得られるものでなくてはならない。

そこで「児童の実態の重視」「児童にとって身近なもの」の2つの条件を基に学習教材を選ぶこととした。

#### ①「児童の実態の重視」

『小学校学習指導要領解説「総合的な学習の時間」p102』では『総合的な学習の時間の学習指導の第1の基本は、学び手としての児童の有能さを引き出し、児童の発想を大切に、育てる主体性、創造的学習活動を展開することである』とある。

児童のよさを引き出すためには、学習教材は児童の実態を的確に捉えそれにあった学習対象を選んだり、単元構成にしたりしなければならない。

#### ②「児童にとって身近なもの」

総合的な学習の時間において、探究的に学ぶことがとても大切である。探究的な学習は、学習対象に様々な視点から繰り返し関わっていくことで学びの質が高まっていく。そのため、学習対象は児童が繰り返し関わることができなければならない。

そのように考えると、学習対象はより児童の身近にあるものの方がよい。学習対象が児童の身近にあることで物理的に関わりやすくなると共に、児童自身の生活と密接に関わり自分事として考えられやすくなるからである。

#### (2) 児童の思考の流れにあった単元の導入

児童の主体性を引き出すためには、児童がどのように学習対象と出会うのかも大切になる。様々な学校でよく見られるのが指導者から突然、学習対象を示され、さらには活動内容もすべて決まっているという実践である。しかし、これでは児童は与えられた課題に取り組むだけになり、主体性は育まれない。そこで、今回は教科の学習と関連付けたり、ゲストティーチャーを活用したりすることによって児童の学習対象への興味関心を少しずつ高めていくことにした。

#### (3) ゲストティーチャーの効果的な活用

ゲストティーチャーを学習の中で活用することで2つのことが期待できると考えた。

1つ目は、専門的な知識や技能に触れることができることである。それらに触れることで児童がさらに知識や技能を高めようとする課題意識が高まったり、活動内容の幅を広げたりすることが期待できるからである。

2つ目は、課題設定の支援である。総合的な学習の時間では、様々な活動や視点で取り組むためたくさん情報があつまり活動の方向性が見えにくくなることがある。そういった場面においてゲストティーチャーが情報を整理したり、活動の価値付けを支援したりすることで課題が明確になり、児童が見通しをもって取り組むことができるようになるからである。

#### (4) オーセンティックな学習の設定

ここでいうオーセンティックというのは、社会的な価値をもつという意味で捉えている。つまり、児童が行ってきた活動が「社会の中で生かされる」ということである。児童が社会貢献できたと感じることで、自己肯定感や自己有用感が高まると考えた。そこで、活動のゴールが明確にもてるような目標をたてることにした。

### 5 実践例総合的な学習の時間『3年おたからせんたいドシレンジャー』

#### (1) 魅力的で発展性のある教材選び

本校の3学年では、地域の文化財が学習のテーマとなっている。そこで、まず地域にどのような文化財があるか教材研究をした。本校の学区には、茨城県指定文化財史跡「仏が浜史跡」の渡志観音や種殿神社があることが分かった。その他にも学区の様々な所に道標や石塔がある。これらのものは、すべて学区内にあり、児童が繰り返し関わるができる。また、地域には長年、地域の歴史や文化財について調べている方がいることも分かった。これらのものを学習教材として単元を構成することにした。

## (2) 本学級の実態

本学級の児童は活発な児童が多く、様々なことに興味をもって活動できる。休み時間に捕まえた昆虫をじっくりと観察したり，図鑑で調べたりしていた。新しいことにも意欲的に取り組み，3年生で覚えた辞書を使った言葉調べなども楽しんで取り組んでいた。授業では，自分の考えを進んで表現できる児童がいる一方で，考えはもつことができても発表が苦手な児童も多く見られた。地域の文化財については，場所や名前を知っている児童が多少いたが詳しい内容について知っている児童はいなかった。

## (3) 児童の思考の流れにあった単元の導入

本実践では，教科との連携，ゲストティーチャーの活用によって児童が文化財に興味をもてるようにした。3年生の社会科のまち探検では，探検前に地図で公共施設などの場所の確認と共に文化財についても確認し，探検の際に児童が文化財の場所や様子が分かるようにした。また，例年行っている「お話の会」では，民話の会の方をゲストティーチャーとして招き学区の文化財に関わる昔話について話していただいた。これらの実践により，実際の場所と学区に伝わる昔話が児童の中で繋がり，もう少し調べてみたいという意欲を引き出すことができた。その意欲を元に再度調べ直しのための探検に行き，文化財への興味をもてるようにした。

## (4) ゲストティーチャーの効果的な活用

探検を繰り返していく中で，地域にある石碑や道標にどのような意味があるのか，なぜそこにあるのか等の疑問を児童がもつようになった。そこでその疑問の解決のために郷土博物館の方や地域の歴史に詳しい方に来ていただいて文化財について教えてもらうことにした。

そこで児童に話してもらう前にゲストティーチャーとの打ち合わせを行った。ゲストティーチャーの方に教師側の学習のねらいや活動の意図を話し，ゲストティーチャーがその中のどのような役割を担っているのか確認した。それを元に実際の授業に臨んだ。児童は，ゲストティーチャーから石碑にどんな意味があるのか，どんな目的で作られたのかなど地域の文化財について多くのことを学ぶことができた。自分達が知りたかったことを知ることができある程度の満足感を得ることができた。さらに，ゲストティーチャーから活動内容のよさを価値づけてもらい，今後の活動のアドバイスをいただいた。



## (5) オーセンティックな学習

ゲストティーチャーの話や現地調査などの活動を通して、児童が文化財の知識や理解を深め、その価値を理解することができた。そして、ゲストティーチャーから文化財の大切さをたくさんの人に知ってもらおうとよいというアドバイスをいただいた。そのことにより、児童は文化財についてたくさんの人に知ってもらいたいという次の課題をもつことができた。その場面で、児童が自分たちの活動が社会の中で生かされたと感じることができるゴールの設定をすることにした。今回は、そのゴールとして文化財の紹介をする映像を作成し、その番組をケーブルテレビで放送してもらおうという目標をたてた。ケーブルテレビの方から番組作りについて教わったり、実際に撮影をしたりしていく中で番組の放送が現実的になり、たくさんの人に文化財を知ってもらえたと実感できるようになったことで児童の意欲をさらに高められた。



## 6 成果と課題

### (1) 成果

今回の4つの手立てを通して児童の主体性を引き出すことができた。学習を進めていく中で、次のような児童の姿が見られた。文化財の調査では、石碑や道標の役割や意味について自分なりの仮説を立てそれにそって調べていた。また、自ら進んで身の回りの大人に聞いたり、図書資料で調べたりしていた。番組作りでは、正確な情報を伝えようと文化財について調べたことを繰り返し確認しながら原稿の作成を行ったり、撮影に向けて自主的にリポートの練習に取り組んだりしていた。また、活動の話し合いでは多くの児童が発言するようになった。そのことで、他の教科でも同じように進んで意見が発表できるようになった。活動の最後の振り返りでは、「田尻小学校のまわりには、たくさん古いものがあるがすごいと思った」「田尻小学校のまわりの文化財をたくさんの人に知ってもらいたい。」など自分たちの地域に愛着をもっている記述が多く見られた。

このように単元全体を通して、意欲的に取り組んできたことで地域への愛着が高まったり、活動の中で身に付けた力が日常の中でも生かせるようになったりすることができるようになった。

### (2) 課題

課題として挙げられるのは、児童の発達段階にあった学習の設定があげられる。今回の活動では、ゲストティーチャーの活用や番組作りを通して文化財への理解を深めることができた。しかし、その理解には児童の発達段階よりも目標の設定が高かった部分があり、児童が難しさを感じた様子も見られた。今後は、児童の実態や発達段階をしっかりと捉えそれに合った学習課題の設定が必要である。